

希望

チューリッヒ日本人学校便り

平成30年3月16日発行

第37号

編集発行 鈴木史良

30回目の卒業証書授与式

—— 卒業生の累計 小学部119名、中学部63名 ——

3月15日、チューリッヒ日本人学校体育館にて、在スイス日本国大使館公使、一方井克哉様、学校運営委員長、井上卓爾様をはじめ、多くの来賓の皆様のご臨席のもと、平成29年度第30回卒業証書授与式を粛々と挙行了いたしました。小学部卒業生はありませんが、中学部卒業生2名の新たな旅立ちを、全校児童生徒及び保護者ご家族、参列者全員で祝福いたしました。本当におめでとうございます。担任の先導で堂々と落ち着いて入場した卒業生たち。やや緊張した様子でしたが、担任の呼名にしっかりとした声で返事をし、凛とした態度で卒業証書を受け取る姿はたいへん立派でした。在校生による「おくる言葉」、卒業生による「別れの言葉」、そして在校生、卒業生の心がもった歌声。卒業生の感謝の思いにあふれた言葉は、参列者全員の心に深くしみ入りました。

<校長式辞より>

寒波の襲来により例年よりも寒さが厳しかった2月。しかし、3月に入り、今年も小さな春を見つけました。シュネー・グロックリイ。「雪の鈴」という名で、雪解けとともに白い可憐な花を咲かせます。春はすぐそこに、そんな自然のエネルギーが大地に満ちあふれる中、今日のよき日を迎えました。(中略)

アレキサンドラさん、飛雄馬さん、卒業おめでとうございます。二人は本日をもって中学校の全課程を修了いたしました。張りつめる緊張のなか、担任からの呼名に堂々とした返事で応じ、卒業証書授与という大切な儀式を落ち着いて成し遂げた二人。その振る舞いは凛とした気品にあふれ、皆様に祝福していただくという喜びと感謝の気持ちがあらわれた、たいへん立派な態度でした。人生において大きな節目を迎えた二人は、これまで慣れ親しんだ学校の日常を懐かしみ、忘れられない思い出もあることでしょう。しかし卒業とは、物事の終わりではなく、新しい世界、新しい日常の始まりでもあります。

ある詩人は卒業を峠道にたとえています。山道を汗しながら登り、峠にたどり着いた旅人は、そこで大きく深呼吸します。登り来た風景をなつかしみ、ひと休みしたあと、そこに別れを告げて下り道に入っていきます。

この時、詩人はこう語ります。「ひとつを失うことなしに、別個の風景に入ってゆけない / 大きな喪失に耐えてのみ、新しい世界がひろがる」と。分かりやすく言えば、人は別れの悲しみを乗り越えて成長していくということです。

本校で学び成長したことは、きっとこれからの二人の人生に役立つものであると信じています。二人とお別れは、送る側も送られる側もたいへんつらく寂しいことですが、ためらわず自信をもって自分の未来に向かって歩いていってください。卒業を心から祝福し、二人に私からはなむけの言葉を贈ります。(後略)



平成29年度卒業記念写真

スイス国歌を歌う意味

卒業証書授与式の中で、本校の子どもたちは原語（ドイツ語）でたいへん立派にスイス国歌を歌いあげました。このような式典で、日本国歌だけでなくスイス国歌を歌うようになったのは、2年前の卒業証書授与式からです。スイス国歌を歌う意味について、歌い始めた当時の説明がありますのでご覧ください。

私たちはスイス国民ではないのに、スイスに住んでいます。スイスで暮らしています。生命を脅かされる不安もなく、当たり前のように生活できるのは、スイスという国の法と秩序に守られているからです。空気も水も街も道路も鉄道もスイスのもので、私たちのものではありません。

だとすれば、私たちはスイスに住んでいるというのは、言い換えれば、スイスに住まわせてもらっているということになります。遠いアジアの端にある小さな島国からやってきた私たちを受け入れ、日本人用の学校までつくらせてくれたスイスという国には、感謝の一念しかありません。私たちがスイス国歌を一生懸命歌うということは、私たちに快適な生活を提供してくれるこの国に、私たちの感謝の気持ちを伝えるとともに、この国を尊重（リスペクト）する心を高めることにほかなりません。日頃お世話になっているスイスの人々のために何かできることがあるとすれば、私たちが心を込めてスイス国歌を歌うこともその一つになるのではないのでしょうか。

<離任される先生方の言葉>



鈴木史良 校長

「グリエッツィ」という挨拶がいたるところで聞こえるウスターの街。美しい湖と緑豊かな街は、人々の心も温かい。そんな街に30年も育まれてきたチューリッヒ日本人学校が大好きです。40年間教員として勤務した最後の学校となりました。授業やさまざまな行事のときにみた子どもたちの笑顔が、一生の思い出となりました。帰国したらのんびりと過ごします。3年間、本当にありがとうございました。



清水 諭 先生

在任中のことを振り返ってみると、常に多くの方々に支えられ、様々なことを経験できた3年間でした。緊張しきりの一年目。分からないことだらけでしたが、逆に一つひとつが新鮮で毎日ドキドキしながら生活していました。二年目から、時間の経つのがどんどん加速し、あっという間に今を迎えています。スイスで経験したことを、少しでも日本の子どもたちに還元できればと思っています。今まで本当にありがとうございました。



廣澤恵理 先生

ウスター城、教会の鐘、豊かな自然、そして子どもたちの笑顔…。たくさんの素敵なものたちに囲れた3年間でした。子どもたちと、スイスだからこその学習を経験できて幸せでした。チューリッヒ日本人学校から、日本各地や他国に羽ばたいていく子どもたちの今後の活躍を楽しみにしつつ、私は、福岡の子どもたちと精一杯やっていきます。皆様に支えられてこそその充実した毎日でした。ありがとうございました。